

点字使用者の後期中等教育段階における漢字指導法についての研究

－適切な墨字文書作成力の向上を目指して－

山形県立山形盲学校 教諭 青 柳 リ エ 子

主として日本語を使用する生活において、漢字・漢語の知識は欠かすことのできないものであり、それは、点字使用者にとっても同様である。しかし、点字使用者はその障害特性から、漢字の知識を習得しにくいという現状があるため、積極的に漢字学習を取り入れる必要がある。その初期段階では、漢字の字形学習を取り入れた指導の有効性が認められるが、基本の字形を習得後は、漢字の音訓・意味・用法の学習が中心となる。特に、後期中等教育段階においては、社会生活上必要とされる漢字・漢語の知識をより多く身に付け、適切な墨字文書を作成できる力の習得が望まれる。そうした力を身に付けるための学習方法として、墨訳学習の有効性を検証した。その結果、生徒の漢字に対する関心を引き出し、文中で正しく漢字を使おうとする意識を持たせることができた。また、学習を進める中で、辞書の活用法を身に付けさせることができた。

キーワード：漢字学習 墨字文書作成力 墨訳

I はじめに

現在の日本語は、一般的に漢字仮名交じり文で表されることが多い。よって、漢字・漢語の知識は日本語を正しく理解し、表現するために欠かすことのできないものである。しかし、若年期から表音文字である点字と音声による学習を中心的に行ってきた者には、表意文字であるこれらの知識を身に付けにくいという、学習上の不利がある。その結果、生徒によっては十分な知識の習得が成されないままに、高等部段階まで至っていることがある。

近年、コンピュータなどの技術の進歩と普及により、点字使用者でも、独力で墨字の文書を作成することが可能になった。これは、表現方法の拡大であり、大変すばらしいことであるが、このことにより、漢字・漢語の知識の必要性が更に高まったと言える。労働の場においても、情報伝達手段として、メールが多く用いられており、適切な墨字文書作成力が要求される。

しかしながら、点字使用生徒が墨字文書を作成するにあたり、多くの間違いが見受けられる。これは、漢字・漢語の知識不足によるところが大きい。

高等部卒業後、どういった進路に進むにしても、墨字で適切に表現する力は、実践的能力として不可欠である。よって、社会生活上必要な力として、漢字・漢語の知識を習得させ、適切な墨字文書を作成

できる力を育てる必要があると考え、この主題を設定した。

※“墨字”とは、点字に対し、普通に書いたり印刷したりした文字のことである。(岩波書店『広辞苑第五版』)

II 研究の内容

1 研究のねらい

(1) コンピュータを利用して、正しい漢字を用いた墨字文書を作成することができるようにするための方法について考察し、実践を通して検証する。

(2) 点字を使用する視覚障害児・者における漢字教育の既存の理論と方法について考察し、理解を深める。

なお、将来的には、生徒が自主学習の中で漢字学習を進め、適切な墨字文書作成ができるようにさせたいと考えている。そのための学習法を身に付けさせることを本研究の要点とする。

2 研究の仮説

漢字に関する基礎知識、及び辞書の活用法を習得させることで、スクリーンリーダーを利用して適切な文字選択ができるようになり、墨字文書作成力を向上させる事ができるであろう。

3 研究方法

- (1) 理論・実践例研究（論文・調査報告・研修会など）
 - ・視覚障害児・者（点字使用児・者）の漢字指導に関する理論の理解と情報収集
 - ・他の盲学校の授業見学による指導実践内容の理解
- (2) 実践研究（所属校高等部普通科で実施）
 - ・漢字指導法検討と教材作成
 - ・対象生徒の実態把握
 - ・指導実践

4 研究内容

(1) 理論・実践例研究

① 点字使用児・者における漢字学習の必要性

「はじめに」でも述べたが、日本語において漢字は重要な働きを担っており、その知識は社会生活上不可欠である。それは、点字を使用する視覚障害児・者にとっても同様である。なぜならば、漢字仮名交じり文で表現し、理解することが一般的となっている現在の日本での社会生活において、漢字・漢語の知識は、円滑なコミュニケーションを促すのに必要だからである。

現在の日本では、幼少時より、漢字仮名交じり文に親しんでいる者が多くを占めている。それにより、日本語では、書き言葉に限らず、話し言葉や、思考のための言葉においても、意識的か、無意識的かは別にしても、漢字や漢語が基盤に置かれることになる。つまり、漢字の知識は、日本語による表現や理解に大きく影響していると言える。したがって、点字使用者といえども、日本語をコミュニケーションの手段としている以上は、漢字を学習し、その用法を正しく理解する必要がある。

特に、視覚障害者が文書を通して情報発信しようとする際、その知識は重要な役割を果たす。点字は視覚障害者の情報収集のために非常に有効なものであるが、発信に際しては理解者が限定される、もしくは理解してもらうのに時間がかかるという不利がある。

今の社会において広く一般に対して速やかな理解を得るには、漢字仮名交じりの墨字文書を用いるのが効率のよい手段であると考えられる。しかし、それは、漢字・漢語に関する正

しい知識が無ければ、適切に作成することができない。

また、職業自立のために、鍼灸按摩マッサージ指圧師の資格を取得することを目指す視覚障害者も少なからずいるが、そのための学習過程では、漢字・漢語が頻出する。それらの意味が理解できず、そのたびに、漢字の読みや意味、用法の学習をしていたのでは、学習効率が大幅に低下することになる。

こうした、現状から、漢字学習を積極的に取り入れることが必要であると考えられる。

「盲学校、聾学校及び養護学校教育要領・学習指導要領」（2004 改訂版）においても、各教科の配慮事項の一部として、小学部・中学部では、『点字を常用して学習する児童に対しても、漢字・漢語の理解を促すため、適切な指導が行われるようにすること』高等部では、『点字を常用して学習する生徒に対しても、漢字・漢語の意味や構成等についての理解を一層促すため、各教科・科目にわたって適切な指導が行われるようにすること』という一文がそれぞれあげられており、点字使用児・者においても、漢字に関する学習を行う必要があるということが示されている。

② 点字使用児・者の漢字学習の可能性

漢字には、形・音・義という3つの側面があるが、点字を常用している者にとっては、音と義が重要となる。しかし、形の学習が全く必要ないかということ、そうではない。漢字学習の導入として、漢字の成り立ちを考えることは重要であり、それには、字形が深く関わってくる。よって、漢字学習の初期には、字形学習も必要となる（この初期段階の漢字学習については、後の③において述べる）。だからといって、使用する漢字の全ての字形を理解しておかなければならないという訳ではない。実際の社会生活上で必要となる知識の大部分は、やはり音と義に関するものである。音と義を頼りに、文の内容を理解し、適切な漢字を用いて表現できる力の育成が求められる。

しかし、漢字は先に述べたように、本来は形音義が一体となって習得されるものであり、だとするならば、視覚障害児・者においては、その特性から、漢字学習がしにくいという現状がある。その中で、点字使用者が生活上有効な程

度の知識を得ることができるのかということを考えるにあたり、城垣内ら(1991)の研究の文脈を手がかりとして、漢字・漢語を同定できるかの調査により、その可能性が示されている。この調査では、点字群（大学生11名、高等部生248名）晴眼者群（大学生35名、中学生26名）を対象としており、その結果（括弧内は正答率）、晴眼大学生群(98.3%)>点字大学生群(81.0%)>晴眼中学生群(76.3%)>点字高等部生群(52.7%)の順で理解度の高さが示された。これは、点字使用者に学習の不利があることを示しているが、点字大学生群の高い正答率を見ると、学習によってその不利をある程度克服できるのではないかと考えられる。

③ 初期の漢字指導について

この研究の主題である、後期中等教育段階における漢字指導のあり方について考えるにあたり、その前段階として、初期の漢字教育の実態について理解しておく必要がある。

澤田ら(2003)の研究では、全盲児童（小学部1年1名・小学部4年1名）に対して、漢字の構成要素学習を行うことによる、その後の漢字学習の発展性が示されている。ここでは、漢字学習の基礎として、漢字の部首になるものや、構成要素となるものについて、その字形を習得することにより、その後、それらを構成要素とする漢字について、どういった組み合わせになるのかなどを説明することで、未学習の漢字でも、イメージ化することができるようになった事例が挙げられている。

また、道村(2000)の全盲児童（小学部1年1名・小学部2年1名）に対する指導実践では、点図による漢字の字形確認を行い、それを踏まえて、音訓や用例の指導を行っている。その成果として、字形を確認することで、漢字の成り立ちのイメージや漢字の構成などにも興味を持ち、理解が深まったと述べている。

これらの事例から、漢字学習の初期における字形学習の有効性が認められる。よって、小学部段階で、基本的な漢字の字形を学習しておくことが、後に漢字の音訓と意味、用例に関する知識習得を中心とした学習を進めていく上で、重要な役割を果たすと言える。

④ 点字使用者における、コンピュータを用いた墨字文書作成について

ア. 視覚障害者のコンピュータの利用について

視覚障害者にとって、視覚を用いたコンピュータ操作は困難である。その困難に対応するために、コンピュータの画面を音声化することが必要となる。このような画面上の情報を読み上げるソフトウェアを総称して、画面音声化ソフト、またはスクリーンリーダーと呼んでいる。スクリーンリーダーにはいくつかの種類があるが、ユーザーの状況に応じて、適切なものを選択し、使用することになる。また、点字使用者の場合、音声以外にも、点字ペンディスプレイの利用が考えられる。これは、ピンを電氣的にコントロールし、画面上の文字情報を、点字の凸点にして表示するものである。こうしたシステムにより、コンピュータを利用して、視覚障害者が墨字文書を作成することが可能になった。

イ. 墨字文書作成力の活用

ここでは、点字使用者が墨字文書作成力を生活上どのような場面で活用しているかについて、いくつか例を挙げ、説明する。

まず、学校生活においては、「総合的な学習の時間」や、「情報」などの教科学習、「特別活動」などにおいて、墨字文書作成が必要となることがある。以下に、これらの現状について述べる。

「総合的な学習の時間」を進めるにあたり、調べ学習や体験学習などを行うことがある。その際の相手先への依頼・質問文書や、アンケート用紙、また、事後のお礼状などは、墨字で作成する必要がある。実際、昨年度の学習では、視覚障害者に関する理解を求めらるしを、墨字で作成して配布したり、点字で書いたお礼状に、それを墨字文で表したものを添えて送付したりするなどの活動を行った。

「情報」の学習では、ホームページ作成や、メール送受信の仕方などを学習しており、その際は、墨字での表記が必要となる。

「特別活動」においては、生徒会活動や部活動に関するプリント類や、掲示・表示物などで、点字のものと墨字のもの、両方が必要となる。これは、墨字使用の児童生徒もいるからである。もちろんこうした活動の中では、墨字使用生徒が中心となって墨字文書を作成することが多いが、点字使用生徒も、役割上、作成を求められることがある。

このように、点字使用者であっても、墨字で文

書を作成することを求められる場面が多々存在している。

また、卒業後の墨字文書作成力活用の状況については、社会福祉法人日本盲人社会福祉施設協議会の在宅視覚障害者の IT 化に伴う情報アクセシビリティに関する調査研究事業委員会（2004）の報告書から、推察することができる。この調査では、働く視覚障害者向けアンケート、及び、事業所向けアンケートを実施しており、この中で仕事上のコミュニケーション手段として、電子メールが利用されていることが示されている。また、視覚障害者が会議資料を作成する方法として、墨字の印刷文書や電子メールが多く用いられていることが示されている。こうした現状から、視覚障害者が社会参加する上で、墨字文書作成力が重要なスキルの一つとなっていると言える。

（2）実践研究

① 課題

新聞コラムの墨訳を通しての漢字学習

※ここでは、点字文書をコンピュータを用いて墨字文書にすることを“墨訳”と呼ぶ。

② 目標

- ・点字の新聞コラムを適切に墨訳することができる。
- ・墨訳時間を短縮することができる。

③ 新聞コラムの墨訳について

コンピュータのスクリーンリーダーを用いて点字文を墨訳することにより、文中でどのような漢字が用いられているかを知ることができる。また、同音異義語や、異字同訓の漢字を使う語句については、変換候補から適切なものを自分で判断して選択する学習に取り組むことで、それぞれの漢字・漢語の意味や用法を理解することができる。こうした学習活動を通して、インターネット辞書や漢字学習事典などを活用し、漢字・漢語について自分で調べる方法を習得することができるのではないかと考えられる。よって、繰り返し墨訳に取り組むことで、漢字・漢語の知識が増えると共に、必要に応じて自分で調べられるようになり、墨字文書を適切に作成することができるようになるのではないかと考える。

この課題では、正誤がはっきりするため、生徒が自分の学習の結果を認識しやすい。それに

より、生徒の意欲を引き出すことができるのではないかと考えられる。

新聞コラムを取り上げたのは、新聞は広く普及しており、一般性が高いため、ここで用いられている漢字の用法を学習することが、一般的墨字文書作成における漢字の適切な使用へとつながるのではないかと考えられるためである。特に、コラムは時事に即しているため、生徒の興味を引きやすく、内容も理解しやすい。また、ある程度短くまとめられており、見通しを持ちやすく、集中力を維持しやすくなるのではないかと考えられる。

④ 生徒について

高等部普通科 3 年。点字使用。主に用いるスクリーンリーダーは 95Reader Version4.5 (XP リーダー) だが、普段利用している公立図書館では PC トーカーも併用している（学校では XP リーダーのみ）。キーボードはローマ字入力。墨字文書を作るためのコンピュータ操作の技能は身につけている。

小学部までは墨字（立体コピー文字）による漢字学習を行ってきており、漢字の形状などについてもある程度理解している。

昨年度当初は、文中にどのような漢字が使われているかということに対する関心が低く、わからない漢字・漢語があることに気付いていない様子が見られた。また、思い込みで漢字をあてはめ、言葉の意味を誤解していることもあった。そこで、文中に使われている言葉の意味や、漢字ではどう書かなどを細かく本人に確認させたところ、わからないものが多いという自覚を持つに至った。それによって、漢字学習の必要性を自ら意識するようになってきている。

墨字文書作成課題にも昨年度後期から取り組んでいるが、漢字の誤変換が多い。それらを修正する際、意味を尋ねると、間違っている語句は、その意味を答えられないことが多い。

⑤ 学習方法について

A. 対象生徒における墨字文書作成時の問題点

漢字の間違が多い（墨字文書（H16. 年度の墨訳学習で行ったもの及び、H17. 4～5 の日記より）での間違い数…94 箇所）

- 同音異義語の間違い（77 箇所）
- 入力ミスによる間違い（11 箇所）
- 未変換による間違い（6 箇所）

イ. 原因

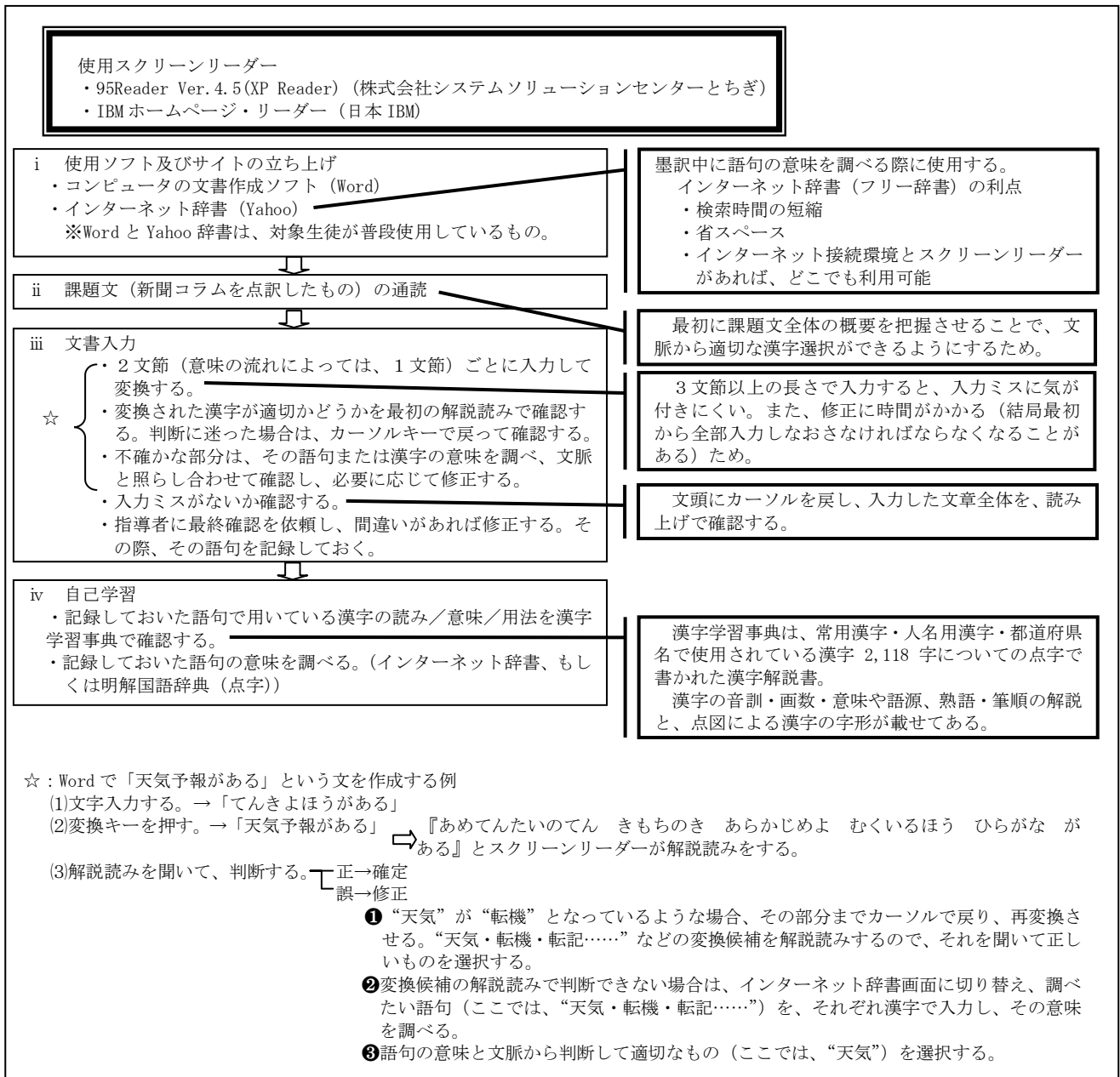
- 内容の理解不足
 - ・文脈に合わない語句を選択している。
- その語句や漢字の意味の無理解、もしくは誤解。
 - ・間違っただ箇所語句の意味を尋ねると、わからない。
- 作成後の確認不足
 - ・入力ミスによる間違いがある。

・一つの課題文の中で、同じ語句でも正しかったり間違っていたりする。

ウ. 対策の要点

- 文章全体（もしくは段落毎）の概要把握
- 語句・漢字の意味調べ
- 十分な確認

エ. 学習の進め方



生徒の墨訳の実態から、課題文の概要を理解し、必要に応じて漢字や語句の意味を調べ、文脈と照らし合わせるにより、適切な漢字を選択する

ことができるようになるのではないかと考えられる。そして、こうした活動を繰り返すことにより、漢字や語句の知識が増えるとともに、文字入力や、

辞書検索の技能が高まり、作成速度が向上するのではないかと考える。しかし、この学習では、正確さを要求される活動（聞き取り・判断・選択・機器操作）が多く、高い集中力が必要となる。よって、1回の学習時間を長くかけすぎず、比較的短い間隔で定期的に学習を行うのが有効であると考えられる。よって、1回の学習で使用する課題文は短めで、その中に判断に迷うもの（同音異義語など）が2～3語入るようなものにするのが妥当であると考えられる。

また、文書を作成する際、確認をしっかりと行うことを意識付けすることも、適切な墨訳のために重要であると考えられる。この確認の作業の有効性については、土屋(2003)の研究において、文書校正課題の、見直しによる検出率の向上という結果によって示されている。

⑥ 実施計画（全11回）

場 所 電子図書閲覧室

指導者 青柳 リエ子

この学習は、授業外で行う補習的学習であり、学習時間帯や、所要時間は対象生徒の事情や、学習の進み具合によって多少変動する。よって、以下に示す時間はおおよその目安である。

a 学習前調査（実態把握）の流れ（1回目（30分））

時間(分)	学習内容	留 意 点
0	コンピュータの準備をする	・文書作成ソフトと合わせてインターネット辞書を起動させる。 ・時間がない場合は、あらかじめ指導者がコンピュータの準備をしておく。 ・所要時間を計測することを生徒と確認する。
2	課題文を読む	・読みやすいように、コンピュータの周辺のスペースを確保しておく。 ・指導者は基本的には声かけなどはせず、生徒の読みにまかせる。 ・課題文は、『よみうり寸評』から、時事に即したもので、かつ、外来語、古語などを含まないものとする。
8	墨字文書	・終わったらその旨を報告する

	を作成する	ように生徒と確認する。 ・指導者は様子観察をすると共に、所要時間を計測する。
28	次回からの漢字学習について確認する	・課題文と文書データを回収する。 ・学習の進め方（回数、内容など）を伝え、最終回でもう一度同じ課題に取り組み、誤変換数と墨訳速度で評価することを確認する。
30	コンピュータを切る	・次回の学習期日を確認する。

b 学習の流れ（2回目～10回目（30分））

時間(分)	学習内容	支援（○）／留意点（・）
0	コンピュータの準備をする	・1回目と同様
2	課題文（1篇）を読む	・1回目と同様
5	墨字文書を作成する	・2文節（意味の流れによっては、1文節）ごとに入力して変換させる。 ・変換された漢字が適切かどうかを最初の解説読みで確認させる。判断に迷った場合は、確定する前にカーソルキーで戻って確認させる。 ・不確かな部分は、その語句または漢字の意味を調べ、文脈と照らし合わせて確認させ、必要に応じて修正させる。 ・全文を読み上げ、入力ミスがないか確認させる。
20	作成した文書を確認する	○修正すべき箇所があるかどうかを指導者が確認し、あればその部分を生徒に教える。その際、修正箇所の数と所要時間を伝える。 ・間違えた語句をメモさせる。 ・修正箇所をスクリーンリーダーで読ませ、用いた漢字を生徒

		自身に確認させる。
25	修正・評価	<ul style="list-style-type: none"> 修正箇所の変換候補を再確認させ、正しいものを選択させる。 ○生徒が選択できずにいる場合、それぞれの漢字や、その語句の意味を確認（インターネット辞書を活用）させ、必要に応じて指導者から補助説明を加えることで、文脈から適切なものを判断できるようにする。 ○修正したものを確認し、なお間違いがあれば、正答を伝え、その語句の意味や漢字の用法を説明する。 ・再度間違えた語句をメモさせる。 ・メモした語句で用いられている漢字について、自主学習（漢字学習事典で調べる）をしておくように促す。
30	コンピュータを切る	<ul style="list-style-type: none"> ・次回の学習期日を確認する。

c 事後調査（実態把握）及び評価の流れ（111項目（40分））

時間（分）	学習内容	支援（○）／留意点（・）
0	コンピュータの準備をする	・1回目と同様
2	課題文を読む	<ul style="list-style-type: none"> ・1回目と同様 ・課題文は1回目に用いたものと同じものを使用する。
8	墨字文書を作成する	・1回目と同様
28	<ul style="list-style-type: none"> ・授業者からの評価 ・生徒の自己評価 	<ul style="list-style-type: none"> ○正答率と作成速度を1回目の時と比較し、どのように変化したかを知らせる。 ○学習をして良かった点、反省点、今後の課題という形で項目を提示し、自己評価を促す。
40	今後の学	・学習の成果と本人の自己評価

習について	から、今後の課題を検討していくことを伝える。
-------	------------------------

⑦ 評価の観点

- 学習前後の調査結果の比較による
- ・墨訳の正答率が上がっているか。
 - ・作成速度が上がっているか。

※墨訳の妥当性の判断基準

原則的に課題原文（新聞コラムからの抜粋）と同様の漢字・仮名使用とし、評価基準とする。

理由：新聞は、筆者の意図が読み手にわかりやすく伝わるように書くことが基本であり、漢字の使い方もそうした前提に基づいている。よって、新聞の用字法を一つの参考基準とすることで、読みやすい文章を書くにあたっての漢字の使い方を身に付けることができるのではないかと考える。

参照：「読売新聞用字用語の手引」「公用文の表記」
墨訳での用字を、上記の2冊と照らし合わせて可否を判断する。その際、「読売新聞用字用語の手引」を優位とする。

※ただし、これはあくまで参考基準であり、表現の豊かさを重視する文章を作成する場合などは、新聞で用いない文字や語句を使用することもあることを生徒に伝え、その文章の目的に応じた漢字使用となることを理解させておきたい。

例外

- ・異字同訓の漢字などで、文脈から判断できないものについては、原文と用字が異なっても、意味的に大きな相違がなければ、正解とする（ただし、使用した漢字が新聞の用字法に合わない場合は不正解）。（a）
- ・一般的でない固有名詞については、評価外とする。（b）

※a・bの場合、墨訳評価・修正時に、原文での用字などについて説明し、修正する。
なお、正答率は以下のようにして算出する。

$$\frac{\text{正しい変換語句数} + (a + b) \text{ の数}}{\text{漢字を使う語句を一つ含む文字群の数}} \times 100$$

⑧ 実践の記録

ア. 学習前調査

ここでは、生徒の墨訳における実態を把握するために、指導者は主として観察を行った。それにより、以下のような墨訳上の問題点が明らかになった。

- a) 一度に入力変換する文節数が多いため、修正する際に時間がかかる。
- b) 不適切な辞書の使い方をしており、意味調べに時間がかかりすぎたり、調べられなかったりしている。
 - ・ひらがなでテキスト入力をしていることがある。それによって候補多数となり、調べられず、使用漢字もわからない。
 - ・単語でなく、文で入力していることがあり、調べられない。
- c) 最終確認をしないため、誤入力に気づかない。
- d) 一つの課題文（460 字程度）を墨訳するのに、1 時間程かかる

こうした問題から、今後学習を進めるにあたり、以下のことを重要事項として指導することにした。

- a) 原則的に 2 文節ずつ入力する。
- b) 辞書の利用の仕方を学習する。
 - ・テキスト入力する際に、漢字に変換させてから辞書検索する。それが適切でない場合は、別の漢字で入力し、検索する。
 - ・文ではなく、単語でテキスト入力をする。
 - ・固有名詞や、造語などで、その意味を調べられないものは、保留しておく。
- c) 全文を通して最終確認をする。

また、時間がかかりすぎるという問題については、課題文の長さを 250 字程度にし、一般性の低い固有名詞などができるだけ入らないものにするこで、対応することにした。

イ. 漢字学習前後の結果

学習に入る際、まず、前述した「学習の進め方」の i ~ iv の流れを、プリントにしたものを生徒に渡し、説明した。その上で、上記の重要事項について確認した。特に、辞書の使い方については、実際にいくつかの語句を入力し、ひらがな入力と漢字入力をした場合の違い、また、単語入力と文入力での違いなどを確かめた。それによって、指導者の提示した方法が妥当であることを理解し、取り組むことができた。

以下に、学習前後の結果を比較し、提示する。

原 文
<p>「談合」…古くは、「だんこう」と読んだ。相談、話し合いのこと。「合」が清音から濁音に変わり「だんごう」となったのは、まさか話し合いの中身が汚く、濁ったからでもあるまいが、そんなジョークも言いたくなる。</p> <p>「談合柱」…昔は、相談相手として頼れる人をそう呼んだというが、事件になった当世の構図で言えば、さしずめ業界の幹事社に当たるだろう。</p> <p>「企業風土」…J R 西日本のトップが口にしたこの言葉を借りれば、「業界の風土」が談合を生んだと言ってもよさそうだ。</p> <p>狭量業界は古参メーカー 17 社からなる「K 会」と後発 30 社による「A 会」が組織的に談合を続けてきた。K は「旧紅葉会」、A は「旧東会」。いったん解散したが、ひそかに復活した。</p> <p>イニシャルに変えたのは、世をしのぶ姿のつもりだろう。が、昨秋、公正取引委員会の立ち入り検査で談合のルールブックと電話連絡表を押さえられた。あまりに明白な証拠で、否認のしようもない。</p> <p>それにしても息の長い談合。発注元の「官」は果たして「芋の煮えたもご存じない」だったのか。</p> <p style="text-align: right;">(2005 年 5 月 24 日付けよみうり寸評)</p>

墨訳結果（学習前）	墨訳結果（学習後）
<p>「談合」…古くは、「だんこう」と呼んだ。相談、話し合いのこと。「合」が清音から濁音に変わり「談合」となったのは、まさか話し合いの中身が汚く、濁ったからでもあるまいが、そんなジョークも言いたくなる。</p> <p>「談合柱」…昔は、相談相手として頼れる人をそう呼んだというが、事件になった統制の構図でいえば、さしずめ業界の完治者に当たるだろう。</p> <p>「企業風土」…J r 西日本のトップが口にしたこの言葉を借りれば、「業界の風土」が談合を生んだといっても良さそうだ。</p> <p>狭量業界は古参メーカー 17 社からなる K と後発 30 社による A 会が組織的に談合を続けてきた。K は「旧こうよう会」、A は「旧東会」。一旦解散したが、密かに復活した。</p> <p>イニシャルに変えたのは、世を忍ぶ姿のつもりだろう。が、昨週、公正取引委員会の立ち入り検査で談合のルールブックと電話連絡表を押さえられた。あまりに明白な証拠で、否認のしようもない。</p> <p>それにしても息の長い談合。発注元の「刊」は果たして「芋の煮えたもご存じない」だったのか。</p>	<p>「談合」…古くは、「だんこう」と読んだ。相談、話し合いのこと。「ごう」が清音から濁音に変わり「談合」となったのは、まさか話し合いの中身が汚く、濁ったからでもあるまいが、そんなジョークも言いたくなる。</p> <p>「談合柱」…昔は、相談相手として頼れる人をそう呼んだというが、事件になった統制の構図でいえば、さしずめ業界の完治者に当たるだろう。</p> <p>「企業風土」…J r 西日本のトップが口にしたこの言葉を借りれば、「業界の風土」が談合を産んだと言ってもよさそうだ。</p> <p>狭量業界は古参メーカー 17 社から「K 会」と興発 30 社による「A 会」が組織的に談合を続けてきた。K は「旧高揚会」、A は「旧東会」。一旦解散したが、密かに復活した。</p> <p>イニシャルに変えたのは、世を忍ぶ姿のつもりだろう。が、昨週、公正取 委員会の立ち入り検査で談合のルールブックと電話連絡表を押さえられた。あまりに明白な証拠で、否認のしようもない。</p> <p>それにしても息の長い談合。発注元の「館」は果たして「芋の煮えたもご存じない」だったのか。</p>

ウ. 漢字を使う語句を一つ含む文字群ごとの対比

- I…誤字
- II…原文と用字が異なる
- III…不足または不要な文字類がある
- IV…原文とは異なるが、文脈に適した用字（文脈から判断できない場合）

} 誤答

原文	墨訳文書（学習前）	墨訳文書（学習後）
1. 「談合」…	○ 「談合」…	○ 「談合」…
2. 古くは、「だんこう」と	○ 古くは、「だんこう」と	○ 古くは、「だんこう」と
3. 読んだ 。	● 呼んだ 。… (IV)	○ 読んだ。
4. 相談、	○ 相談、	○ 相談、
5. 話し合いのこと。	○ 話し合いのこと。	○ 話し合いのこと。
6. 「合」が	○ 「合」が	● 「ごう」 が… (IV)
7. 清音から	○ 清音から	○ 清音から
8. 濁音に	○ 濁音に	○ 濁音に
9. 変わり「 だんごう 」となったのは、まさか	● 変わり「 談合 」となったのは、まさか… (IV)	● 変わり「 談合 」となったのは、まさか… (IV)
10. 話し合いの	○ 話し合いの	○ 話し合いの
11. 中身が	○ 中身が	○ 中身が
12. 汚く、	○ 汚く、	○ 汚く、
13. 濁ったからでもあるまいが、そんなジョークも	○ 濁ったからでもあるまいが、そんなジョークも	○ 濁ったからでもあるまいが、そんなジョークも
14. 言いたくなる。	○ 言いたくなる。	○ 言いたくなる。
15. 「談合柱」…	○ 「談合柱」…	○ 「談合柱」…
16. 昔は、	○ 昔は、	○ 昔は、
17. 相談相手として	○ 相談相手として	○ 相談相手として
18. 頼れる	○ 頼れる	○ 頼れる
19. 人をそう	○ 人をそう	○ 人をそう
20. 呼んだというが、	○ 呼んだというが、	○ 呼んだというが、
21. 事件になった	○ 事件になった	○ 事件になった
22. 当世 の	× 統制 の… (I)	× 統制 の… (I)
23. 構図で	○ 構図で	○ 構図で
24. 言えは 、さしずめ	× いえは 、さしずめ… (II)	× いえは 、さしずめ… (II)
25. 業界の	○ 業界の	○ 業界の
26. 幹事社 に	× 完治者 に… (I)	× 完治者 に… (I)
27. 当たるだろう。	○ 当たるだろう。	× 当る だろう。… (II)
28. 「企業風土」…	○ 「企業風土」…	○ 「企業風土」…
29. JR 西日本のトップが	× Jr 西日本のトップが… (I)	× Jr 西日本のトップが… (I)
30. 口にしたこの	○ 口にしたこの	○ 口にしたこの
31. 言葉を	○ 言葉を	○ 言葉を
32. 借りれば、	○ 借りれば、	○ 借りれば、
33. 〈業界の	○ 「業界の	○ 「業界の
34. 風土〉が	○ 風土〉が	○ 風土〉が
35. 談合を	○ 談合を	○ 談合を
36. 生んだと	○ 生んだと	× 産んだ と… (I)
37. 言っても よさそうだ。	× いっても 良さそうだ。… (II)	○ 言ってもよさそうだ。
38. 橋梁 業界は	× 狭量 業界は… (I)	× 狭量 業界は… (I)
39. 古参メーカー	○ 古参メーカー	○ 古参メーカー
40. 17社からなる	○ 17社からなる	× 17社から … (III)
41. 「 K会 」と	× K と… (III)	○ 「K会」と
42. 後発	○ 後発	× 興発 … (I)
43. 30社による	○ 30社による	○ 30社による
44. 「 A会 」が	× A会 が… (III)	○ 「A会」が
45. 組織的に	○ 組織的に	○ 組織的に
46. 談合を	○ 談合を	○ 談合を
47. 続けてきた。Kは	○ 続けてきた。Kは	○ 続けてきた。Kは
48. 「旧	○ 「旧	○ 「旧
49. 紅葉会 」、Aは	● こうよう 会」、Aは… (IV)	● 高揚 会」、Aは… (IV)
50. 「旧	○ 「旧	○ 「旧

51. 東会」。 いったん	×東会」。一旦… (Ⅱ)	×東会」。一旦… (Ⅱ)
52. 解散したが、 ひそかに	×解散したが、 密かに … (Ⅱ)	×解散したが、 密かに … (Ⅱ)
53. 復活した。イニシャルに	○ 復活した。イニシャルに	○ 復活した。イニシャルに
54. 変えたのは、	○ 変えたのは、	○ 変えたのは、
55. 世を しのぶ	○ 世を 忍ぶ …手引では「忍ぶ」として いる。	○ 世を 忍ぶ …手引では「忍ぶ」とし ている。
56. 姿のつもりだろう。が、	○ 姿のつもりだろう。が、	○ 姿のつもりだろう。が、
57. 昨秋 、	● 昨週 、… (Ⅳ)	● 昨週 、… (Ⅳ)
58. 公正取引委員会の	○ 公正取引委員会の	×公正取 引 委員会の… (Ⅲ)
59. 立ち入り検査で	○ 立ち入り検査で	○ 立ち入り検査で
60. 談合のルールブックと	○ 談合のルールブックと	○ 談合のルールブックと
61. 電話連絡表を	○ 電話連絡表を	○ 電話連絡表を
62. 押さえられた。あまりに	○ 押さえられた。あまりに	○ 押さえられた。あまりに
63. 明白な	○ 明白な	○ 明白な
64. 証拠で、	○ 証拠で、	○ 証拠で、
65. 否認のしようもない。それにしても	○ 否認のしようもない。それにしても	○ 否認のしようもない。それにしても
66. 息の	○ 息の	○ 息の
67. 長い	○ 長い	○ 長い
68. 談合。	○ 談合。	○ 談合。
69. 発注元の	○ 発注元の	○ 発注元の
70. 「 罰 」は	×「 罰 」は… (Ⅰ)	×「 罰 」は… (Ⅰ)
71. 果たして	○ 果たして	○ 果たして
72. 「芋の	○ 「芋の	○ 「芋の
73. 煮えたも	○ 煮えたも	○ 煮えたも
74. ご存じない」だったのか。	○ ご存じない」だったのか。	×ご存じない」だったのか ら … (Ⅲ)

エ. 結果比較

	学習前	学習後
原文との相違点 (Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ…誤答) (Ⅳ…許容)	I…5 II…4 III…2 IV…5	I…7 II…4 III…3 IV…4
正答率	$63 \div 74 \times 100 \approx 85.1\%$	$60 \div 74 \times 100 \approx 81.0\%$
所要時間	65:47:58	37:32:76

オ. 漢字学習の様子

以下は、学習状況をまとめた表である。

	正答率	相違点	時間	生徒の感想（墨訳後、修正前）	学習の様子と考察
学習前 調査 460 字程 度	85.1% (63/74)	I…5 II…4 III…2 IV…5	44:25:39 (予定時 間超の ため、途 中で中 断) 残り 21:23:19 計 65:47:58	<ul style="list-style-type: none"> ・わかっていそうな漢字も、やってみるとわからないものがあった。 ・言葉の意味がわからないと、漢字が選べない。 ・辞書を使う時に、入力をひらがなと漢字のどちらがいいか迷う。 ・タイピングミスがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○一度に入力変換する文節数が多いため、修正する際に時間がかかる。 ○不適切な辞書の使い方をしており、意味調べに時間がかかりすぎたり、調べられなかったりしている。 ・ひらがなでテキスト入力をしていることがあり、それにより、候補多数となり、調べられず、使用漢字もわからない。 ・単語でなく、文で入力していることがあり、調べられない。 ○最終確認をしないため、誤入力に気づかない。
学習1 250 字前 後	84.2% (48/57)	I…5 II…4 III…0 IV…0	22:40:12	<ul style="list-style-type: none"> ・2文節で入力すると、間違ったときにすぐに直せて良かった。 ・全文通読してからと、1～2文ずつ読んで入力するのがあまり差は感じなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○辞書入力では漢字変換してから入力することで、余計な情報が制限されるので、比較的スムーズにできているようだった。 ○墨訳後、間違っているところを指摘し、その前後の流れから、その語句がどのような意味を持つものかを、文脈から考えさせたところ、適切な意味をとらえることができた。その後もう一度あらためて解説読みを聞いて選ばせたところ、適切な語句を選択することができた。
学習2	88.8%	I…0	16:55:72	<ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすい内容の文章だった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○辞書検索の方法が身についてきた。

250 字前 後	(40/45)	Ⅱ…5 Ⅲ…0 Ⅳ…2		たので、語句の意味が想像しやすく、それで、漢字も思い浮かべやすかった。	○文脈から語句の意味を考え、漢字を判断していた。 ○異字同訓の漢字についての説明により、筆者の意図によって、用字が変わることを理解した。(聴くー聞く)
学習 3 250 字前 後	92% (47/51)	Ⅰ…1 Ⅱ…2 Ⅲ…1 Ⅳ…3	27:17:78	<ul style="list-style-type: none"> ・「しょうとつたい」で、最初深く考えすぎてしまった。しかし、文脈から「しょうとつたい」とは、何らかの塊だと思ったので、「たい」は「物体の体」ではないかと考え、「衝突体」とした。 ・「きょうちょう」はかなり迷ったが、辞書で調べて「凶兆」の意味がわかり、これだと思った。 ・辞書は、漢字で検索することで、目的の語句が見つけやすくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○漢字選択に迷ったときは、もう一度文脈の内容を考えて判断しており、それにより、適切な選択をすることができた。 ○墨訳後の確認が不十分なところがあり、余字などの間違いが見受けられた。その点について本人と話し合い、正確さを意識するように指導した。
学習 4 250 字前 後	91.4% (43/47)	Ⅰ…2 Ⅱ…2 Ⅲ…0 Ⅳ…2	18:37:82	<ul style="list-style-type: none"> ・できたという手ごたえがあった。文脈に沿って判断できた自信がある。 ・通読してからやると、後の文の流れが頭に入っているのので、1～2文ずつ読んで入力するよりも、漢字の判断がしやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習前にやっていた、1～2文ずつ読んで、すぐ入力する自己流の方法と、本学習で行っている、全文を通読してから入力するのでは、違いがあるかどうかを尋ねると、「通読してからの方が、文章全体の流れが頭に入っているのので、文脈に沿った判断をしやすい」と話していた。学習を始めた直後にも同様の質問をしたが、その時は、「あまり違いは感じられない」と話していた。この感想の変化から、文章の内容と、用いるべき漢字との関連を意識して学習に取り組むようになってきていることがうかがえる。 ○送り仮名の付け方など、自分から質問してきた。読みやすい書き方について自ら考えようとする姿勢がうかがえる。
学習 5 300 字程 度	84.1% (53/63)	Ⅰ…8 Ⅱ…2 Ⅲ…0 Ⅳ…2	31:54:59	<ul style="list-style-type: none"> ・使い慣れない言葉が多く、難しかった。全く聞いたことがないわけではないが、漢字が思い浮かばなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○単純な入力ミスは、見直しの段階で気づいて修正できるようになってきた。 ○書き言葉で用いるような表現の知識不足が見られる。 ○語句の意味がイメージできないと漢字も想起できない。 ○異字同訓の漢字の判断に困難がある。 誤例) 心に留める→心に止める うたう(謳う)→唄う
学習 6 290 字程 度	97.3% (73/75)	Ⅰ…1 Ⅱ…1 Ⅲ…0 Ⅳ…1	27 分 30 秒	<ul style="list-style-type: none"> ・できたという感じ。 ・最初に(課題文を)読んだ時、周知とは何だ?と思ったが、山の周辺に関することだと思っていたところ、周辺の周と読み上げたので、これでいいと思った ・文脈から漢字をイメージできた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○感想では、文脈からイメージできたとのことだったが、「負った」や「周知」の解釈の仕方を見ると、まだ、文脈を読み取る力不足が見られる。 ○「稲妻」がなぜこう書くのか疑問に思った。ということから、漢字に対する関心が高まってきているのではないと思われる。
学習 7 280 字程 度	89.3% (59/66)	Ⅰ…3 Ⅱ…4 Ⅲ…0 Ⅳ…6	29:14:58	<ul style="list-style-type: none"> ・割とできた。不安はあるが、文脈と照らし合わせてやれた。 ・わからない言葉は「潮目」 	<ul style="list-style-type: none"> ○インターネット辞書の使い方、「潮目」を検索すると、「潮境に同じ」とだけ表示され、どうしたらいいのかわからなくなり、意味を調べられず困っているということがあった。こういう場合は、「潮境」で調べるように助言し、調べさせた。また、「～し難い」という言葉を調べるには、「し難い」ではなく、「難い」で検索するということと、この場合、読み方が「がたい」ではなく、「かたい」になるということを学習した。こうしたことから、辞書を使いこなせるようになるには、辞書を使う機会を作り、様々なパターンで調べてみる必要がある。 ○文脈を考慮したとは言いが、「小紙」→「小誌」「懸賞」

					→「検証」「高揚」→「公用」とするなど、まだ文脈よりも漢語の音だけで判断しているところがあるように思われる。
学習 8 280 字程 度	77% (47/61)	I…8 II…5 III…1 IV…1	33:36:30	<ul style="list-style-type: none"> 漢字を当てはめるのが難しかった。文脈に沿って考えてみたのだが、使ったことのない言葉は、よくわからなかった。辞書で意味を確認した段階では合っていると思った。 言葉の意味は何となくわかるが、漢字があてられないものもあった。「しかく」など。※しかし、この「しかく」も確認すると、間違った意味で解釈していた。 	<ul style="list-style-type: none"> 漢字か仮名かの判断に迷い、漢字にすべきところを仮名にしてしまうパターンが多かった。以前の、とりあえず漢字にしておこうという状態から変化が見られる。漢字と仮名の使い分けを身に付ける過渡期にあるのではないか。また、生徒から、「造反組つぶし」の「つぶし」は漢字かひらがなか？という質問が出された。このことから、漢字と仮名の使い分けを意識していることがうかがえる。 意味や使用漢字がわからない語句について、文脈から判断しようとする意識はしっかり身につけてきているようだが、解釈が間違っていることがあり、自分が知っている同音異義語をあてはめてしまうことがあった。しかし、意味がよくわからないものや、曖昧なものについて、自ら辞書を引き、調べながら墨訳を進めており、言葉に関心を持って積極的に学習しようとする姿勢がうかがえた。 「皇帝ネロ」を知らないために、文脈が理解できず、漢字もイメージできなかった。普段の教養が適切な漢字選択に大きく影響している。関心の高い分野（自然科学分野など）について書かれた文章の墨訳は、間違いが少なく、低いものは間違いやすい。幅広い知識が必要。
学 習 後 調 査 460 字程 度	81% (60/74)	I…7 II…4 III…3 IV…4	37:32:76	<ul style="list-style-type: none"> 自信は無い。一回目と余り変わらない気がする（同じ間違いをしている気がする）。 以前わからなかったところで、調べてわかったところもあった。（「古参」「東をあずまと読むこと」） 漢字にすべきか、仮名にすべきか判断できない。 「Kかい」「Aかい」の《かい》が《会》でいいのか迷ったが、何かの集まりだと思ったので《会》にした。 わからない言葉は特になかった。 漢字の勉強にはなっていると思う（学習全体を通して）。 	<ul style="list-style-type: none"> 「わからない言葉はない」と言いつつ、細かく尋ねると、わからない、曖昧な語句が多く、その意味を答えることができなかった。ここに大きな問題の一つがあると思われる。自分が理解できているのか、いないのかの判断ができない。よって、調べようとしない。その結果、正しく文章を理解、表現することができない。 語句の意味を考えることが不十分、いまだ、音のみで選んでしまうことがある。しかしながら、以前の何も考えずにPCの変換にまかせっきりの頃よりも、意味を考えようとしてきてはいる。それによって、間違ってしまうこともあるが、自分で考え判断することを重ねることで、正しい知識と判断力が身に付くのではないかと考えられる。 課題文の背景にある社会情勢の理解や、一般的教養を身に付けることが、正しい理解と表現のために必要である。よって多面的な知識を得ることを意識づけさせたい。

⑨ 学習前後比較からの考察

評価の観点である正答率、及び文書作成速度の学習前後の比較結果と、学習の様子から指導実践について考察する。

墨訳の正答率については、85.1%（前）→81.0%（後）と数値が下がっている。また、作成の所要時間については、およそ65分（前）→37分（後）と短縮しており、作成速度が上がっている。この結果について、その原因を次のように考えた。

【正答率の低下】

誤答の内容を細かく見ていくと、次のような種類に分けられる。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> ① 語句の意味がわからない、または、誤解による間違い。 ② 異字同訓の漢字の使い分けの間違い。 ③ 常用漢字表外の漢字、または音訓を使用している。 ④ 漢字と仮名の使い分けの間違い。 ⑤ 送り仮名の付け方の間違い。 ⑥ ミスによるもの。（入力・聞き取り・点字文の読み取り） |
|---|

この中で、学習後の墨訳でのみ間違っただけのもの、**①②⑤⑥**である。

①は、「後発」を「興発」とした間違い。この字にした理由は、変換候補の「後発」を聞き逃したためということだった。（「興発」の意味を辞書で調べたが、意味が表示されず、調べられなかった。しかし、他に候補がないと勘違いし、「興発」とした。）

墨訳後に改めて確認させた際には、正しい選択ができた。…（a）

②は「生んだ」を「産んだ」としたことによる間違いである。この字を選んだ理由は、解説読みで『「うまれる」と読み上げたので、意味から考えてこれにした』とのことだった。…（b）

⑤は、「当たる」を「当る」としたものである。これは、公用文では、読み間違えるおそれのない場合は、許容とされているが、「読売新聞用字用語の手引」では、「当たる」としているの、これに準じれば、間違いとなる。…（c）

⑥は、脱字が3箇所、これは確認不足によるものと考えられる。…（d）

このような誤答につながった理由を、学習の進め方と照らし合わせて考察する。

（a）は、聞き逃しというミスと、学習を進める上での確認事項とした、「固有名詞や、造語などで、その意味を調べられないものは、保留にしておく」に従ったのではないかと考えられる。

（b）については、本人の発言からもわかるが、これは、文脈から判断して漢字を選ぶということ、意識づけたことによるものではないかと考えられる。文脈から考えると、この語句の意味は「発生した、生まれた」ということになるため、解説読みが「うまれる」と読み上げたことで、想定した意味と合うと判断し、この字にしたと考えられる。

（c）は、送り仮名の付け方の基準があいまいであることによると考えられる。

（d）は、3箇所あり、数が多い。しかし、学習1～8の結果を見ると、こういうミス（原文との相違…Ⅲ）は0～1箇所と少ない。こうしたことから、学習後調査時のみの特徴であると思われる。こうしたミスが学習後調査でのみ多い理由として、開始前に、この結果を評価基準とすることを対象生徒に話したことで、必要以上の緊張状態となり、注意力の低下につながってしまったのではないかと考えられる。

また、学習前後共に、同じ語句で間違いが見られ

るものがある。内容としては**①③④⑥**の間違いである。以下にその語句を抜き出す。

①「当世」→「統制」…（e）
 「幹事社」→「完治者」
 「橋梁」→「狭量」
 「官」→「刊」（学習前）
 「館」（学習後）

（f）

③（**④**）「いったん」→「一旦」
 「ひそか」→「密か」

（g）

④「言えば」→「いえば」…（h）

⑥「JR」→「Jr」…（☆）

（☆）については、点字の二重大文字（2文字以上の大文字が連続することを示す符号）の読み取りミスによるものなので、漢字使用についての問題からは除外する。

（e）は、「当世」という言葉を全く知らなかったため推測できなかったということと、文章の前に出てくる「昔」に対して「今」のことだという読み取りができなかったことによると考えられる。そのため、音だけで判断して何となくあてはめる結果となった。

（f）は、話題の中心となっている「談合」が、理解できていなかったため、それに付随する語句がイメージできなかったためと考えられる。これは、辞書の利用を漢字選択ができない場合ということに第一に考えて進めてきたことによるのではないかとと思われる。漢字だけでなく、語句の意味にも注目し、自分が理解しているかどうか考え、わからない場合はその意味を調べるという意識付けが足りなかったのではないかとと思われる。

（g）は、常用漢字として示されている漢字とその音訓の学習が不足によるものと思われるが、それだけではなく、漢字と仮名の使い分けの基準があいまいとなっていることも要因となっているのではないかと考えられる。

（h）は、「…という場合」などの「いう」（形式化した用法）ではひらがなを使用するが、実質的な表出作用を持っている場合は、「言う」とする。といった使い分け方の学習不足によるものと考えられる。

このように、多様な要因によって、間違いが発生していることがわかる。

結果的に、正答率が向上しなかったことから、本研究で実施した墨訳学習だけでは、不十分であり、これらの問題に対処するための学習が必要であると考えられる。

ただし、⑥のような間違いについては、墨訳の修正過程で注意を促すことで、対応できるのではないかと思われる。

【作成速度の向上】

学習前後で大きく変化しているのが、作成速度である。その要因を考えるに際して、生徒の学習状況を撮影したビデオによる比較を行った。それにより、以下のような点を速度向上の理由として見いだした。

- | |
|---|
| A. 解説読みを手がかりにして、文脈に合っている漢字であるかを判断し、同音異義語の変換候補から選択するのが速くなった。
B. インターネット辞書検索が速くなった。
C. 効率的に文字入力できるようになった。
D. 文脈から漢字を判断できないもの（固有名詞など）は保留し、先に進むようになった。 |
|---|

上記のA～Dについて、考察したものを次に述べる。

Aについてであるが、例えば、「会」「旧」「姿」などの漢字を、学習前は、最初の解説読みだけでは、判断できず、変換候補を何度も確認する様子が見られた。しかし、学習後は、最初の解説読みですぐに判断できるようになっていた。これは、音訓と用法から、適切な漢字をすばやく判断する力が身につけてきていることによるのではないかと考えられる。

しかし、誤答である「完治者」「狭量」「館」といった語句については、墨訳後の生徒の説明により、自分なりに漢字の音訓と意味を考えて判断しているが、文の内容が理解できていないために、間違っていることがわかった。以下が生徒の判断理由である。

語句	理由
完治者	何らかの人物だと思った。「かんじしゃ」と入力したら「完治者」と変換され、「者」＝人物と考え、これでいいと思った。「完治」については「完全に政治をする」という意味だととらえ、何となく政治がらみの話だろうと思ったのでこれにした。
狭量	「狭い業界」のことだと考えた。
館	何かの組織のことだろうと思い、「館」⇒「建物」⇒「(何らかの)会社」と連想して考えた。

こうしたことから、適切な墨字文書を作成するには、一つ一つの漢字の音訓や意味を知っているだけでは不十分であり、文章全体の内容とその背景を考え、文脈から語句の意味を推察し、それに合う漢字・漢語を選択するという、多面的に考え、判断する力が必要であるということがわかる。

Bは、この学習を通して、学習前に指示した辞書

の用法を理解し、活用できたことと、学習過程の中で、より効率的な検索法を習得したことによる結果であると考えられる。

Cは、文字入力・変換を1～2文節ごとに行うようにさせたことで、3文節以上で入力していたとき（学習前）よりも、入力ミスなどに気づきやすくなり、また、修正も素早くできるようになったことによると考えられる。

また、Dからは、文脈からの漢字選択の可否を判断し、不可であれば他者に確認依頼をするという（学習過程で指導した）方法の理解と定着がうかがえる。

⑩ 成果と課題

学習前後の結果比較と、生徒の感想や質問、学習の様子観察から、この指導実践によって得られた成果と課題を考察し、以下にまとめた。

成果	○漢字の音訓と意味、用法について考えようとする意識の定着。 ○漢字と仮名を使い分けようとする意識の定着。 ○漢字に対する関心の高まり。 ○インターネット辞書や漢字学習事典を適切に利用する技能の習得。 ○入力効率の向上。
課題	○文章の内容理解力の向上。 ○漢字、仮名の使い分けについての理解（常用漢字表の漢字と音訓の理解）。 ○使用頻度の高い異字同訓の漢字の使い分けについての理解。 ○送り仮名の付け方の理解。

この漢字学習によって、文脈を意識し、文全体の意味、語句の意味、個々の漢字の意味などを考えて漢字を正しく使おうとするようになった。また、漢字そのものにも興味を持つ様子が見られるようになった。それは、生徒の感想などからうかがうことができる。これは、適切な墨字文書を作成できるようになるために必要な意識であり、それを持たせることができたことが、実践の成果と言える。

また、辞書の適切な利用の仕方を身に付けたことや、入力効率が向上したことは、今後の学習に有効である。

以下は、より効率的に辞書を利用できるように改善した点である。

検索語入力の仕方 ・漢字使用の語句は、漢字に変換してから検索する。 ・文章ではなく、単語で入力する。
--

- ・活用のある語は、終止形で入力する。
- ・検索条件の変更（「で始まる」「に一致する」などの条件を必要に応じて変更し、検索効率を上げる）。
- ・「○○と同じ」という表示が出された場合、「○○」について調べる。

漢字学習事典の使い方

- ・索引本を使って、検索する。
 - ・事典の説明の中にわからない語句があれば、それについても調べる。
- ※常用外の漢字の場合は、支援者が字義などを説明する。

なお、学習の様子からは、対象生徒の学習意欲の高まりも見られた。

学習中は、集中して墨訳を行い、指導者の助言をしっかり聞いて、学習に取り組んでいる様子が見られた。また、全11回の学習終了後は、「以前よりは漢字の知識が身に付いてきたように感じる。」「続けてこのような学習を行いたい。」といった感想が聞かれた。

このような意欲の背景には、本人が漢字学習の必要性を感じていたということがあってはならないと考えられる。学習前に、生徒に課題意識を持たせられたことで、学習に対する前向きな気持ちが高まったのではないだろうか。

こうした意識は、今後の学習においても大切なものであり、維持できるようにさせたい。

しかし、学習前後で正答率に変化が見られなかったことは、大きな問題点であり、そこからいくつかの課題が挙げられる。

墨訳をするには、課題文の内容全体を理解することが必要であることがこの実践を通して、はっきりした。それは、学習の課題文の違いによって、正答率が上下することからもわかる。

正答率が90%を越える課題文は、内容が生徒の興味あることに関するものであり、使用したことがない語句でも、文脈から判断してある程度適切にその意味を予測することができたため、誤答が少なくなっている。一方、正答率が低い問題は、生徒があまり関心を持っていない内容のものであった。そのため、その課題文の内容を理解できず、文脈から判断しにくくなり、結局、音訓だけを手がかりに何となく漢字をあてはめるといった状態になっていた。

つまり、課題文の背景にある事象に関する基礎知識がないと、正しい理解と表現ができないということであり、漢字の音訓・意味・主な用法など

を抜き出して学習するだけでは、適切な墨訳はできないと考えられる。

文章の中で適切に漢字を使うには、その文章に関わる事象について知る必要があると考えられる。そのためには、多様な内容の文章を読み、理解することで、そうした知識が身に付くのではないかとと思われる。

本研究で行った学習では、新聞コラムを題材としており、その内容は、様々な分野に及んでいる。こうした文章を墨訳することで、上述したような効果が得られると考えられる。さらに、使われている語句の意味が理解できているかを考える習慣を身に付けさせ、そのつど辞書で調べさせることで、より内容理解が深まると考えられる。その中で、どんな漢字・漢語を使うべきかを考え、理解する事で、生活の中で生きる漢字力が身に付くのではないかとと思われる。こうした点から、墨訳学習は有効な学習法であると考えられる。

しかし、それだけではもちろん不十分であり、漢字の基礎知識及び日本語の文法に関する知識を付けるための学習と組み合わせて行う必要がある。

漢字を多用しすぎると、読み手がわかりにくい文章となる。そこで、漢字、仮名を使い分ける必要がある。その際、新聞や公用文などで基準とされる常用漢字を目安にするのが良いと考えられる。よって、常用漢字の音訓と用法を学習することが必要である。また、漢字、仮名の使い分けや、送り仮名の付け方は、日本語の文法と関わってくるので、文法に関する学習も合わせて行う必要がある。

その他、異字同訓の漢字で、使用頻度が高い語句の使い分け方の例や、送り仮名の付け方の基準をまとめたものを資料として配布し、自主学习に活用できるようにすることも考えられる。

よって、今後の課題は、墨訳と組み合わせて、常用漢字の基礎知識と文法について学習する方法を検討するとともに、有効な補助資料を作成することであると考えられる。

III 研究のまとめ

1 研究成果

この研究を通して、点字使用者であっても漢字を学習することの必要性をあらためて認識する

ことができた。その中で漢字の字形学習の有効性や、漢字の音訓・用法・語例などの学習の必要性、墨字文書作成力の活用法などについて理解を深めることができた。

また、指導実践を通して、適切な墨字文書を作成することができるようになるには、文章の中で漢字を使う学習と、漢字や日本語の基礎知識を習得するための学習を組み合わせる必要があることが明らかになった。

2 今後の課題

初期の漢字学習における字形学習の有効性について更に検証し、児童生徒の実態を考慮した上で、学習に取り入れることを検討したいと考える。

また、墨訳学習と漢字や文法などに関する基礎学習の組み合わせ方を検討し、生徒が自主学習できるような教材作成につなげたい。

IV おわりに

本研究では、後期中等教育段階での漢字指導法に焦点を絞った。しかし、漢字学習は、積み重ねによって、より高い効果が得られるものであり、初等教育段階からの系統的漢字学習の進め方を考える必要があると思われる。よって、今後は前述した課題に取り組むと共に、他学部の指導者と協力して漢字学習計画を立てることを考えていきたい。

このたび貴重な研修の機会を与えて下さった、山形県立山形盲学校 相田憲治校長、山形県教育委員会に心より御礼申し上げます。

そして、本研究を進めるに際して、佐藤義雄所長をはじめとする、山形県教育センターの先生方には貴重な御助言をいただいた。特に、五十嵐隆夫指導主事には、丁寧な御指導、御支援をいただき、成果と課題を見いだすことができた。また、山形盲学校の職員の皆様にも、多くの御協力をいただいた。深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省 2004 改訂版『盲学校、聾学校及び養護学校教育要領・学習指導要領（平成 11 年 3 月）』p 小・中 11/p 高 19
- 2) 城垣内和子・高柳富士乃・瀬尾政雄 1991『点字使用者の漢字・漢語の理解度について』筑波大学心身障害学系 視覚障害教育研究室 視覚

生涯教育論文集（3）, pp86-102

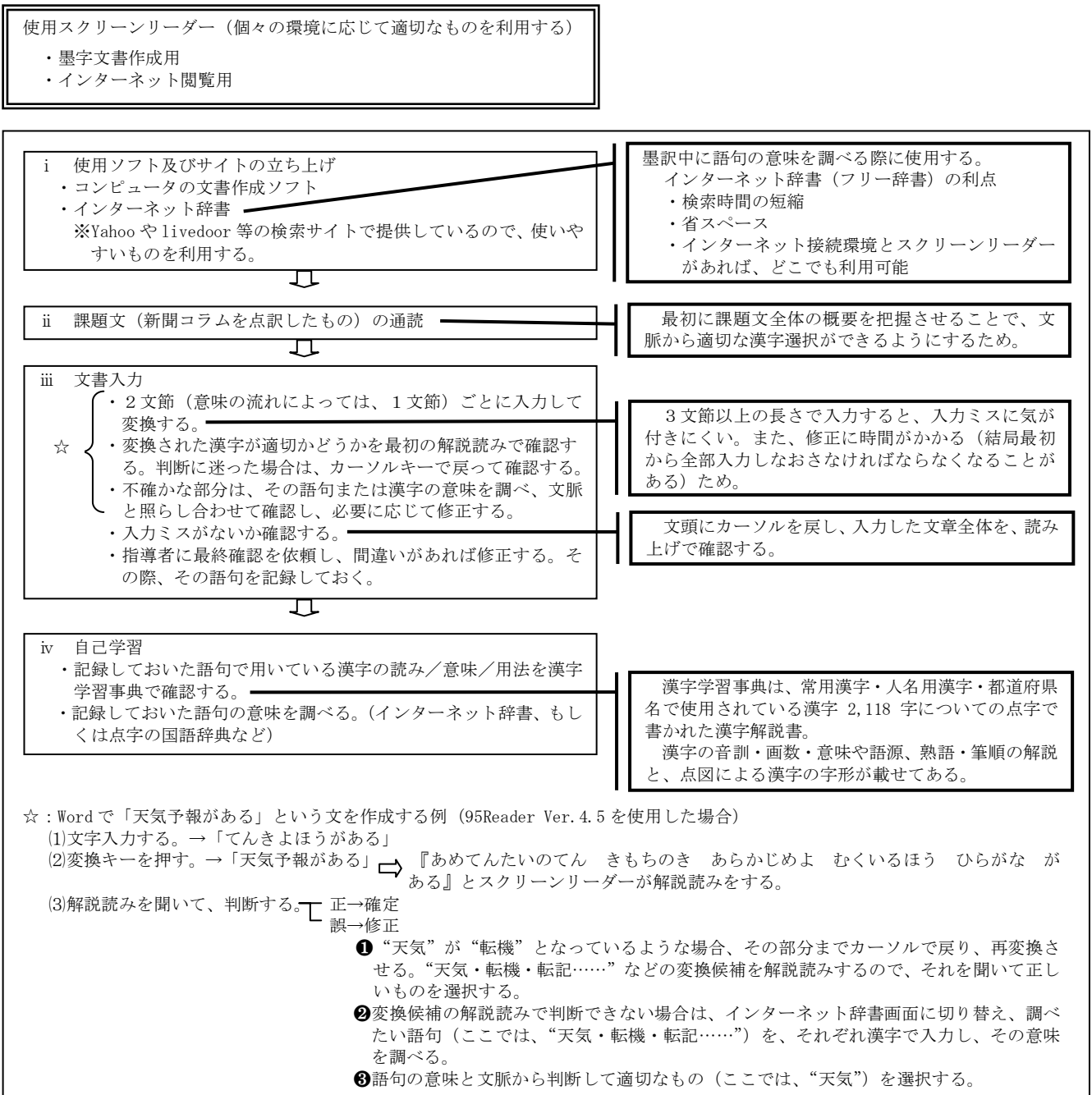
- 3) 澤田真弓・香川邦生・千田耕基 2003『全盲児童の漢字構成要素学習の有効性についての検討』国立特殊教育総合研究所研究紀要第 30 巻, pp51-60
- 4) 道村静江『点字使用の児童生徒のための 漢字指導資料作成とその活用』文部科学省「授業にコンピュータを活用しよう」盲・ろう・養護学校・特殊学級編 CD-ROM <http://www.yokomou.ed.jp/joho/tj0012.html>
- 5) 社会福祉法人日本盲人社会福祉施設協議会 在宅視覚障害者の IT 化に伴う情報アクセシビリティに関する調査研究事業委員会 2004『在宅視覚障害者の IT 化に伴う情報アクセシビリティに関する調査研究事業報告書-コミュニケーション手段から就労への可能性について-』 <http://www.ncawb.org/>
- 6) 土屋勝広 2003『点字使用者における画面音声化ソフトによる同音異義語の漢字変換に関する研究』発達支援研究, pp4-6 <http://www.juen.ac.jp/lab/era/v5pdf/tsuchiya.pdf>
- 7) 斎賀秀夫 1989『移行措置に役立つ漢字指導の方法』光村図書, pp261-274
- 8) YOMIURI ONLINE（読売新聞）墨訳課題文として『よみうり寸評』の一部を引用 <http://www.yomiuri.co.jp/>

参考文献

- 1) 文部省 1996『視覚障害児のための 言語の理解と表現の指導』文部省, pp64-90
- 2) 斉藤寿美子『視覚障害をもつ生徒の国語指導におけるコンピュータの活用』文部科学省「授業にコンピュータを活用しよう」盲・ろう・養護学校・特殊学級編 CD-ROM <http://www.yokomou.ed.jp/joho/tj0014.html>
- 3) 道村静江『「点字使用者のための漢字学習資料」の活用方法と指導法』点字学習を支援する会漢字学習支援グループ <http://tenji-sien.net/kanji/kanjidown.htm>
- 4) 言語技術教育研究所 2001『教育科学 国語教育 No.610』明治図書
- 5) 宮地裕編 2005『「日本語学」特集テーマ別ファイル（5）漢字・漢語』明治書院
- 6) 読売新聞社編 2005『読売新聞 用字用語の手引』中央公論新社
- 7) 東方出版社編 2004『公用文の表記』東方出版社

参考資料1

墨訳学習の進め方（文章の中で使える言葉の力を伸ばすために）



	検索語入力の仕方（インターネット辞書）	漢字学習事典の使い方
辞書の使い方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 漢字使用の語句は、漢字に変換してから検索する。 ・ 文章ではなく、単語で入力する。 ・ 活用のある語は、終止形で入力する。 ・ 検索条件の変更（「で始まる」「に一致する」などの条件を必要に応じて変更し、検索効率を上げる）。 ・ 「○○と同じ」という表示が出された場合、「○○」について調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 索引本を使って、検索する。 ・ 事典の説明の中にわからない語句があれば、それについても調べる。 ※ 常用外の漢字の場合は、支援者が字義などを説明する。

※新聞コラムなどは、新聞社のホームページに掲載されており、それらのデータをもとにして点訳ソフトで点訳することができるため、課題文の作成時間を短縮できる利点がある。

参考資料2

学習課題文（読売新聞「よみうり寸評」より引用）

【学習1】

北欧諸国では夏至祭の前夜から、沈まぬ太陽の下、人々は篝火（かがりび）をたき、色とりどりの民族衣装で踊り明かす。夏至はバカンスシーズンの始まり、南欧に下る人も多い。昼の時間が最も長い夏至、太陽は天空の頂点にある。その祭りは冬の長い北欧ならではの歓喜、太陽神崇拜が起こり。

同じ夏至を迎えても、日本とは随分違う。日本の夏至はちょうど梅雨時に迎えるから、取り立ててお祭り騒ぎなど行事には結びつかなかったのだろう。が、今年の梅雨はいささか様相が違うようだ。西日本は少雨、北陸、東北部の梅雨入りは遅れている。（2005年6月22日付け）

【学習2】

音が楽しい、と書いて音楽。お気に入りのメロディーに心躍らせる人は多いはずだ。

音楽に感動するのは遺伝子が理由だろう。もともと「生命の設計図」といわれる遺伝情報は楽譜と似たところがあるという。むしろ違いは大きい。音楽は空気の振動で感性に訴えるもの。遺伝情報は細胞にある物質の並び方。だが、似ているなら、遺伝情報を音楽にできないか。

専門家の協力でオオサンショウウオの遺伝情報を分析。五線譜に落とし込んだ。それをCDにしたピアノ演奏を聴いてみた。静かな清流に生息するオオサンショウウオらしい、穏やかな調べが続く。（2005年6月25日付け）

【学習3】

米航空宇宙局の探査機が目標のテンペル第1彗星に銅の衝突体を命中させた。その瞬間、研究者たちは歓声を上げ、抱き合った。

彗星は超高速ではるか遠い宇宙を飛んでいる。そこに探査機が接近、衝突体を発射して命中させた。探査機は500キロ離れたところから衝突の様子も撮影した。太陽系誕生の謎に解明の手がかりが得られるかも知れない。すごい離れ業だった。が、ゲームなどで仮想現実にとっぷり漬かっているようだと、この命中のすごさに鈍感であるかもしれないなどとも思った。

あすは七夕。昔、彗星は凶兆だと恐れられた。天空へ寄せる思いに今昔の感が深い。

（2005年7月6日付け）

【学習4】

前進か足踏みか、それとも後退なのか。英国で開催された「主要国首脳会議」で最重要議題とされていた地球温暖化問題の評価が定かでない。

海外のマスコミの評価は総じて低いようにみえる。確かに米国は「温暖化は科学的に不確実」の立場は通した。だが、微妙なサミット声明文をみると米国も妥協を迫られた跡もある。米国が初めて、温暖化に「人間の活動」が影響していると認め、科学的な証明があれば温室効果ガスの増加を止めるとの「内容」にも合意した。

温暖化防止の国際交渉は長い年月がかかる。わずかな「前進」でも積み重ねていきたい。（2005年7月16日付け）

【学習5】

「祖国とは国語」…藤原正彦さんの著書の題名。心にとめておきたい言葉である。氏は数学者だが「一に国語、二に国語、三、四がなくて五に算数」と初等教育の基本を説いてきた。「文化も伝統も情緒も、日本という国はすべて言葉の中にある」そんな意味が込められている。

「文字・活字文化振興法案」が衆院を通過した。人々の活字離れ、読解力低下に歯止めをかけ、本に親しむようと願いを込めた。法案は公立図書館の適切な配置もうたっている。

これを読んで公立図書館の蔵書を司書が独断で廃棄した一件を思い起こした。司書のこんな思考と行動は、活字文化の振興をはかる法の精神には遠い。「仏つくって魂入れず」にならないようにしたい。（2005年7月20日付け）

【学習6】

千葉県白子（しらこ）町の海水浴場で落雷のため重軽傷を負った9人のうち重体だった男性1人が昨日死亡した。監視員が浜辺へ誘導中に落雷、波打ち際の男女数人が倒れた。雷雲は発達した足が速い。雨雲、稲妻、雷鳴が近いなら、姿勢を低くして海の家や車の中へ避難を急ぐといい。

山の落雷の怖さは周知のことだが、海では、「雷に注意」が山ほどは念頭がない。だが、1987年8月、高知県生見（いくみ）海岸でサーフィン中の高校生らが落雷に遭い、6人死亡、6人負傷の例もある。山に限らず、海でも野でも要注意。

今夏各地に雷雨の予報がしばしば出る。明るい夏を暗転させないように、雷へ心の備えを点検しよう。（2005年8月2日付け）

【学習7】

今の憲法で初の衆院解散は、1948年12月23日、吉田内閣時の「なれあい解散」だった。翌24日の小紙は「衆議院昨夜解散す」と報じる記事とともに「各党は何名とるか」と銘打った懸賞社告を掲げている。一等5万円。目的は「総選挙に対する関心高揚」にあり、「どの政党が復興を急がねばならぬ日本を背負って立つ建設的政党であるかを検討し」「各党の実体を十分御研究の上応募されん」とある。

きのう現憲法下で20回目の衆院解散。政界は大きな潮目にある。戦後まもなくの選挙に劣らず重大で、結果は予想し難い。有権者は今こそ、どの党が建設的政党であるか、実体をよく検討、研究して投票すべきではないか。（2005年8月9日付け）

【学習8】

「9・11」…きょうからちょうど1か月後にその日を迎える。突然の解散による今度の総選挙の投票日は、米同時テロの記憶が強烈なその日に当たる。そのせいでもあるまいが、「刺客」とか「抹殺」とか物騒な言葉が飛び交っている。

小泉首相は郵政民営化法案に反対票を投じた全員に対抗馬を立てて選挙に臨むという。対抗馬は反対派から見れば刺客、この作戦は造反組つぶし、抹殺の仕掛けだ。自民党の「コップの中の嵐」もコップの水をまき散らした解散で大嵐の様相だ。郵政民営化法案を頓挫させられた首相の執念の強さを思う。

「おれは非情」と「変人以上の男」はそう言った。「まるで皇帝ネロ」と造反組。首相自身は「ガリレオ」のつもり。今回はその真実を見分ける選挙にもなる。（2005年8月11日付け）

参考資料3

主なスクリーンリーダーの紹介（2005年9月現在）

スクリーンリーダー名	問い合わせ先
95Reader Ver.6.0 (XP Reader)	システムソリューションセンターとちぎ (SSCT)
・JAWS for Windows (IBM Version) Version 4.5	(株) 日本アイ・ビー・エム
・PC-Talker Version5 ・PC-Talker XP	(株) 高知システム開発
・outSPOKEN Solo(アウトスポークンソロ) 2.01 JPN ・outSPOKEN Ensemble(アウトスポークン アンサンブル) 2.01 JPN	(株) 富士通中部システムズ
・VDM100W-PC-Talker V5 ・VDMW300-PC-Talker-XP	(株) アクセス・テクノロジー
WinVoice Ver 2.01	(株) ニュー・ブレイル・システム

ウェブブラウザ向けスクリーンリーダー名	問い合わせ先
ホームページ・リーダー Windows 版 Ver3.04	(株) 日本アイ・ビー・エム
ボイスサーフィン	(株) アメディア